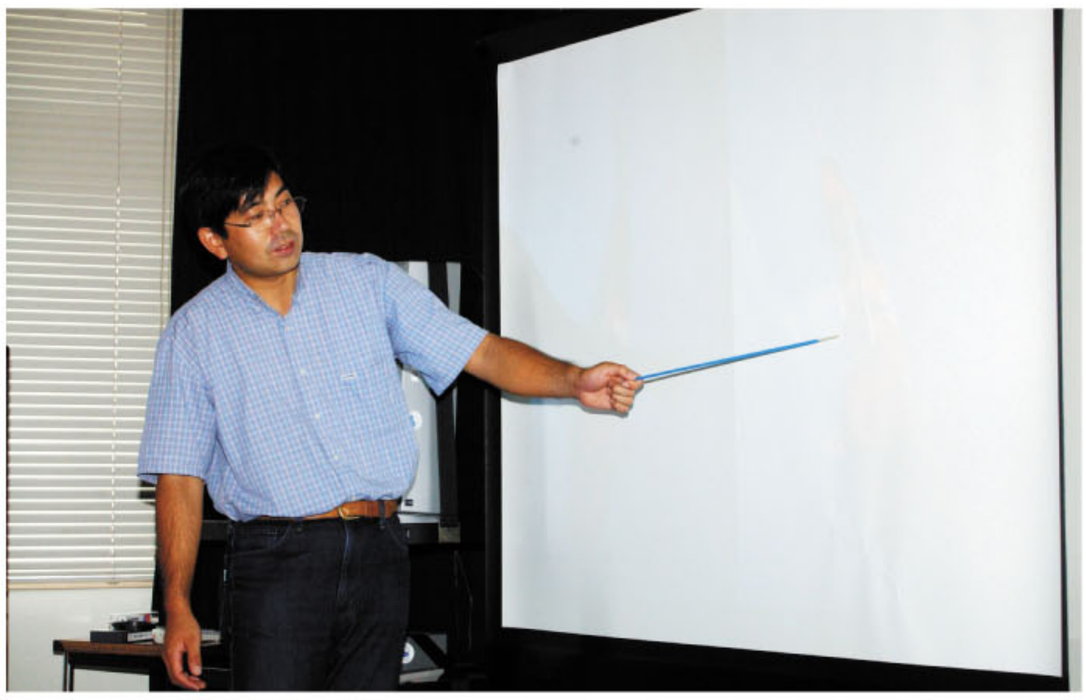
三昭和

墨の変化を楽しむ

第1回

平成16年9月20日（祝）、横浜錦鯉の大菊拓朗氏が金沢産業振興センター（横浜市）で行った錦鯉セミナー、『昭和三色―墨の変化を楽しむ』のもようを、今月号から3回にわたって紹介します。

今回は昭和誕生と、阪井産、大栄産昭和の変化を追います。



好評・大菊さんの錦鯉セミナー。今回は昭和編

誕生は昭和2年 小林昭和が大きな転換点に

今日は錦鯉セミナーにお集まり下さいまして、ありがとうございます。今日は昭和について、スライドを使いながらやっていきたいと思います。

まず昭和三色というと、どんな種類かは皆さんもご存じだと思います。昭和三色が出来たのが、昭和2年です。今から70年くらい前ですか、それほど古い種類ではありません。竹沢の星野重吉さんという人が作ったそうです。どういうふうに作ったかと言いますと、柏崎から買ってきた黄写りに紅白を交配して作ったのが始まりと言われています。

現在のような、赤が綺麗で紅白のような模様の昭和が出来たのが昭和39年です。あの有名な小林富次さんが「小林昭和」と今でも言われている昭和を作ったことが発端となって、今のような綺麗な昭和が出来るようになりました。ですから、まだ歴史の浅い種類なのですが、人気があります。

墨の質が将来のカギを握る 最上の墨質「茄子紺の漆墨」

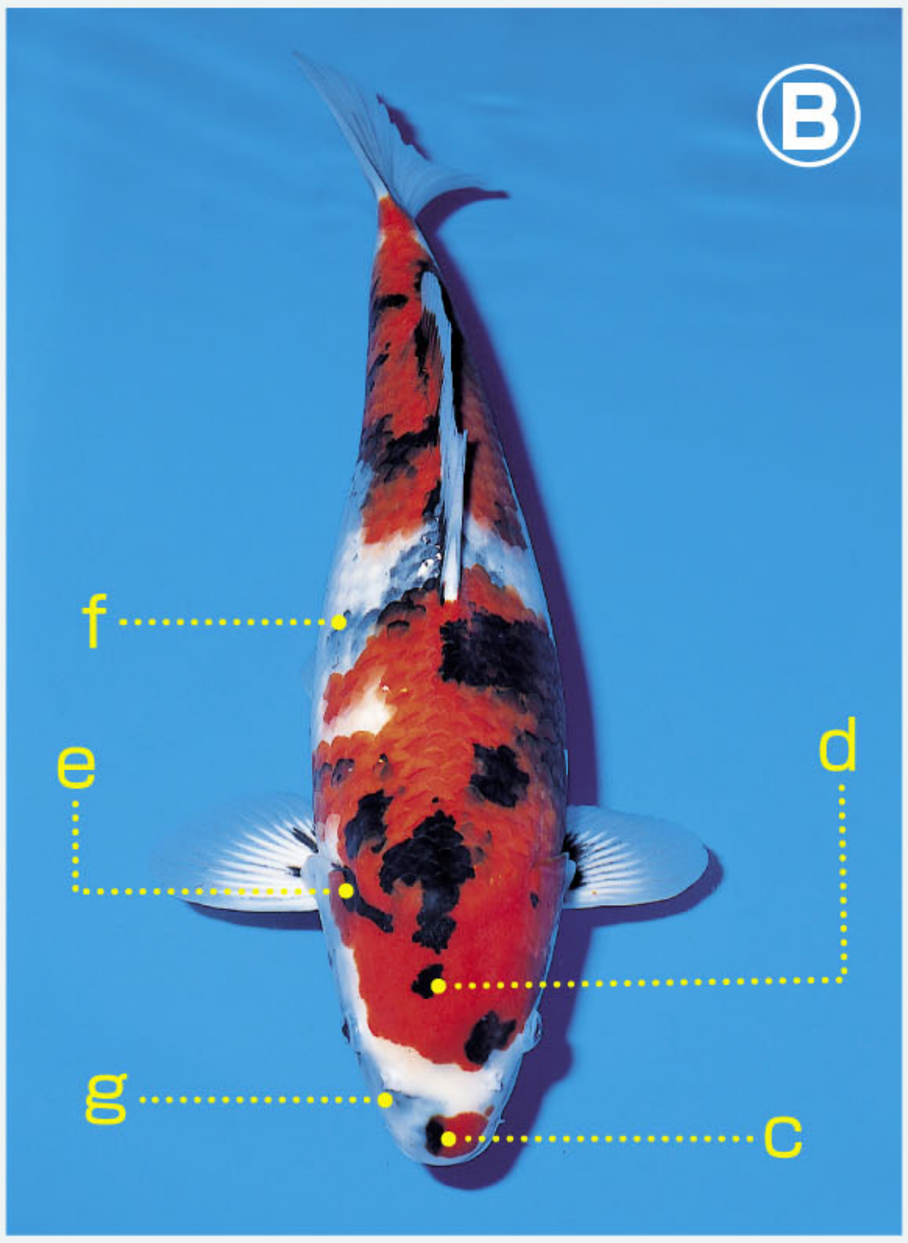
昭和三色の見方といいますと、皆さんは墨の変化が楽しいと感じられると思いますが、その墨がどういう質をしているかということによって、将来性や、その後の墨の出方というのが変わってくると思います。

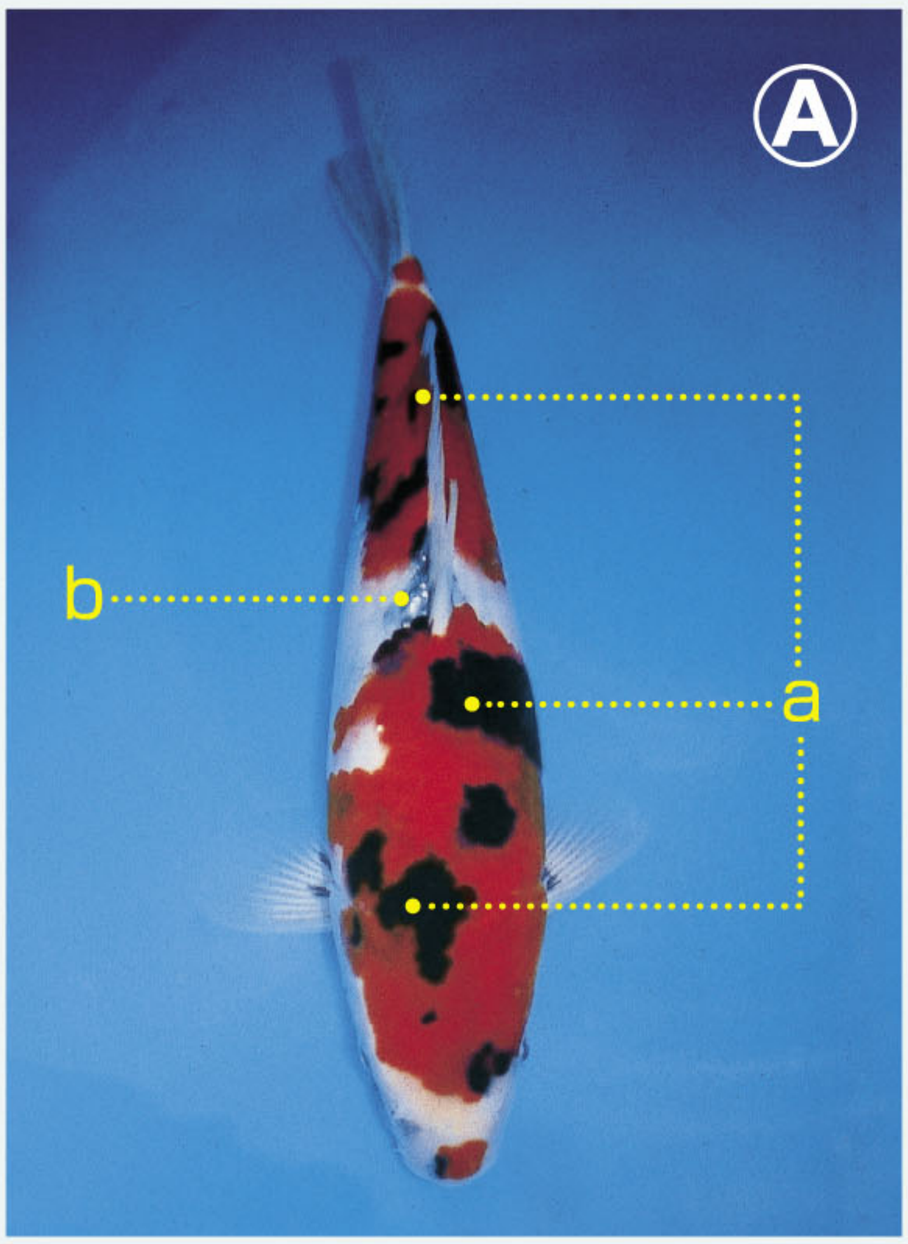
墨にはどんな種類があるかというと、一つは「鍋墨（なべずみ）」と言って、真鯉の黒と同じような色をした墨です。鱗の輪郭が見えるような感じの墨です。

あとは緋模様の上に重なっている墨のことを「重ね墨（かさずみ）」と言いますね。この重ね墨と言うのが、往々にして下地に赤があるので綺麗に見えるんですが、薄い墨が多いです。ただし、緋の下から出ている墨の場合は、重ね墨でも綺麗な墨質です。

あとは「影墨（かげずみ）」です。浅黄のような墨質の鯉ですね。墨絵を描いたような感じの昭和があります。

そしてどういう墨質が一番いいかと言うと、「茄子紺の漆墨（なすこんのうるしずみ）」と言われている、ちょっと光沢のかかった、漆黒の墨ですね。墨汁のようなツヤのあるカラス色をした墨です。茄子が熟したようなときの色だと……そういう感じの墨が一番魅力があるとされています。





写真①／広島・阪井産「芙蓉」系

真鯉のように真っ黒の稚魚 赤が出て白が出て…昭和の姿に

昭和がどのような過程で変化していくかと言いますと、稚魚から飼った方ならわかると思うんですが、最初生まれたときは真っ黒なんですね、真鯉みたいで。黒仔と言われています。黒い魚がだんだん模様が剥(む)けてきて、赤が出てきて白地が出てきて、というような感じで、こういうガラになるんです。最初は真っ黒なんです。それがだんだん剥けてくる。

昭和の特徴としては下から墨が上がってきて、上にいくほど面積が小さくなる……剥けてきた証拠で、元々は昭和というのは白地じゃなくて黒地の鯉なんです。黒地に白と赤があるというのが本来の昭和の姿です。それがだんだん近代化されてきて白地が多くなってきて、墨が一つの模様になってきているというような感じです。

昭和の選び方というと、即品評会で使えそうな鯉と、その後大きくしてから良くなっていく立て鯉的な鯉と、二つの選択肢があるわけですが、特に今日は、立て向きの魚の変化について、2年3年飼い込んでいって、当才が3才になり、4才になったときにどういうふうに変わっていくか、これからスライドで実際の鯉の成長過程を見ながら、変化を見ていきたいと思います。

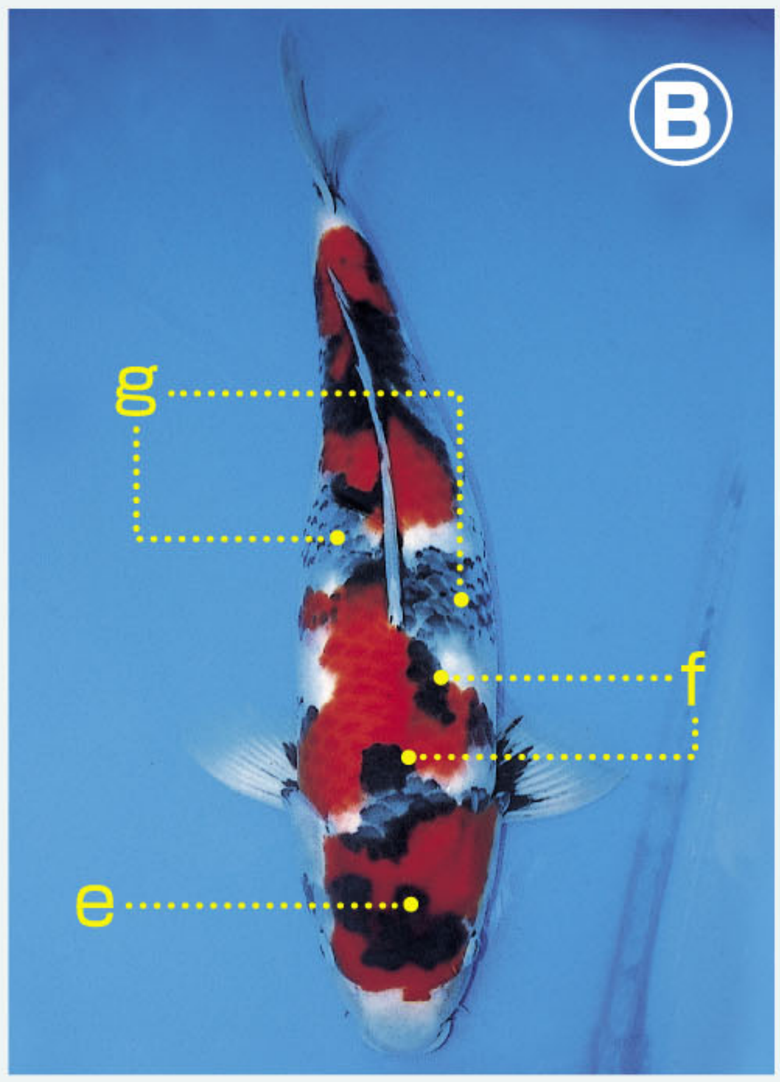
墨の変化を追う——阪井産昭和①

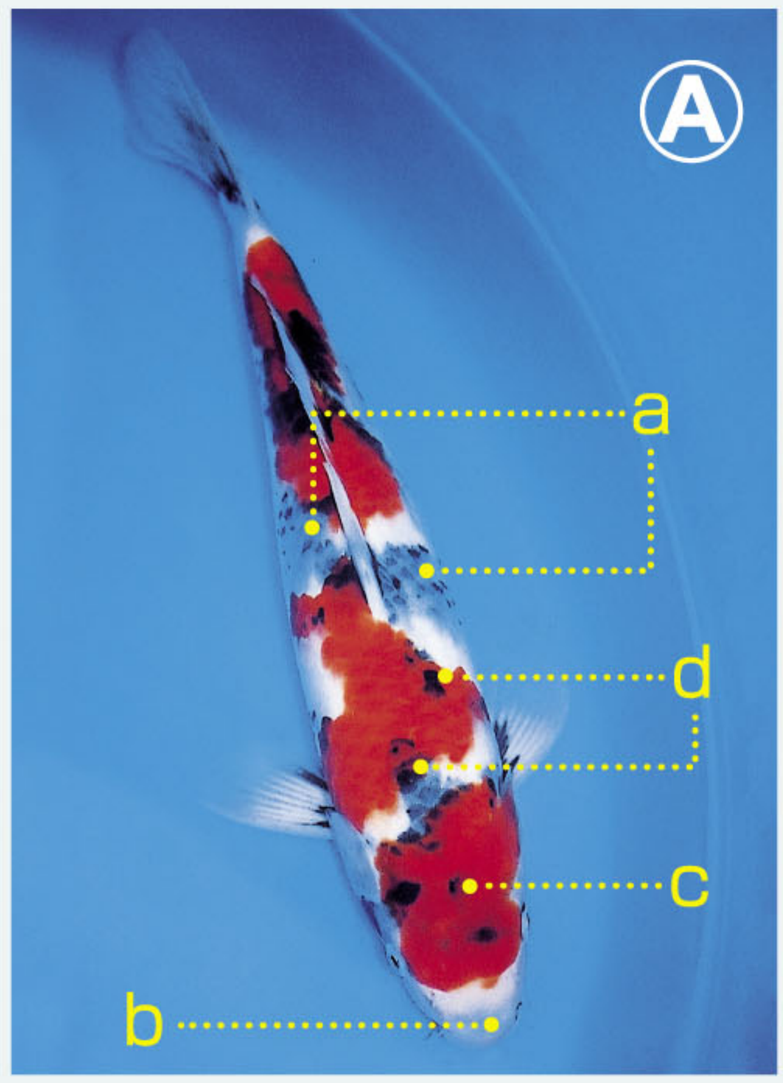
まず一つのサンプルとして、広島県の阪井養魚場の昭和です。

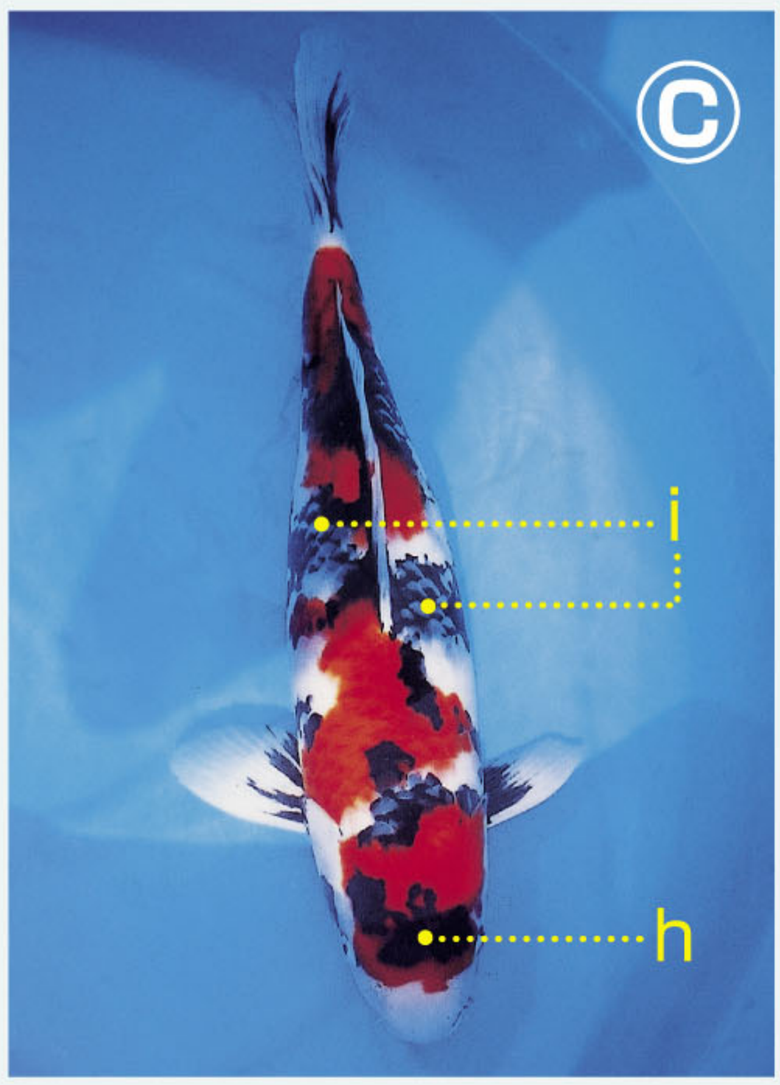
これ（写真①—A）は阪井養魚場で作られた昭和の当才、春の明け2才ですね。サイズで言うと25㎝から30㎝くらいの鯉でしょうか。今から写すのは全部うちで販売した鯉なので、見た方もいるかと思います。

この昭和は今見ると、当才にしてはかなりはっきりと墨が出ています。ここがちょうど重なっている墨ですね（a）。これが白地にある墨（b）で、ちょうど浅黄みたいな感じで、出そうで出ないんですが、緋にかかっているところが、当才の感じでは墨が浮き出しています。

この昭和を半年間飼い込むことで、どういう変化をもたらすかというと、こういうふうになります（写真①—B）。これ（写真①—A）が5月、ゴールデンウイークのころで、池揚げしたときが10月ですから、だ







写真②／広島・阪井産「ポパイ」系

いたい5カ月から6カ月後にこういうふうに（写真①―B）なりました。2才ですね。

どういうふうに変わったかと言いますと、まずこの口の墨が増えていますよね（c）。口墨の増加、それと鉢のところの墨が、当才のころはちょっとまだボヤーっとしていたんですが、このボヤーっとした墨がはっきり固まって、当才のときは三ツ星のようになっていたのが、一つの島のように固まって、頭の中央にある墨も小さい墨だったのが、その3倍くらいの大きさになってきています（d）。

あと顕著なのが、首のところですね。鰓蓋の上のところに墨が上がって浮き出しています（e）。このとき（当才）は全く沈んでいて、なかったところです。

あと先ほどの浅黄墨みたいなところ（b）がどうなってきたかというと、かなり白地の下のほうまではっきりと墨が浮いています（f）。まだ完全な仕上がりではありませんが。だいたいは、同じ位置にある墨がしっかりとまとまってきたという感じの変化です。

半年ですから、そんなに劇的な変化というのはないかもしれないですが、この鯉の質からすると、墨が凝縮されて締まってくると、2才のような形になるということが予想できます。昭和は半年でこれだけ変化するわけですね。これがまた1年飼って2年飼うと、今沈んでいる鼻のこれが（g）おそらく一つの塊になって、ここのところ（f）に出てきている墨がはっきりした墨になると、ほぼ完成という感じになるかと思います。

墨の変化を追う――阪井産昭和②

もう一つ、同じく広島阪井産の昭

和の変化を見てみたいと思います。こちらの昭和です（**写真②—A**）。これも同じく5月の連休ころの写真です。先ほどの写真の鯉（**写真①**）とこの鯉は親が違うんですね。写真②の親は、阪井養魚場産でも「ポパイ」という名称の鯉です。

見ていただくと、浅黄の網目のような墨が白地のところに出ています（**a**）。また、写真では少しわかりにくいですが、口墨が少し沈んだ状態（**b**）、鉢のところ（**c**）にも少し緋盤の中に沈んだ状態で墨がありません。当才のときに、緋盤の中にこの程度沈んでいて凝縮されている墨（**d**）は、緋盤の下から出ている墨ですから、後から必ず出てきます。

これが半年後にどうなるかというと、泥池に入れて6カ月経った姿がこれです（**写真②—B**）。さっきの頭のところの沈んだ墨が浮き出してきて（**e**）、それと肩のところの墨がだんだんと増えてきて（**f**）、緋盤の中に沈んでいる墨も頭と同様、浮き出してきて（**f**）、墨模様が形成されています。ここの白地にあるこの墨も、同じように当才時以上に浮いてきています。

これが半年後の姿で、さらにこれをもう1年育てて3才にするとどうなるかというと、これが3才の姿です（**写真②—C**）。頭に浮いてきた墨が締まってきているんですね（**h**）。このとき（**②—B**）はまだちょっとボヤーっとしていたんですが（**e**）、締まってきています。

で、全体的に墨が締まろう、締まろうという傾向があるので、体にある墨もだんだん黒く締まってきて、この浅黄目の状態から（**g**）さらに一段と墨が濃くなっているという状態です（**i**）。この秋にこの鯉が4才になって揚がってくるんですけども、さらに墨が締まって揚がってくるのではなかろうかと予測できます。

大菊さんの丁寧な解説は毎回好評だ

墨の変化を追う——阪井産昭和③

もう一つも阪井の昭和です。これも当才の写真です（**写真③—A**）。これは写真①の昭和と兄弟の鯉で、「芙蓉（ふよう）」系の鯉です。

この鯉がどのように変化したかと言いますと、写真が悪いんですが、この状態で見ていただくと、墨が全般的に少し沈んだ感じの、少しボヤーっとしたような鯉ですね。緋盤も毛布を引きちぎったような感じの、キワが少しボヤーっとした感じの、特に頭のあたりですね（**a**）。このへんとか、少しキワがボヤーっとした感じの鯉なんですけども、これを半年間泥池に入れてどう変わったかと言いますと、こうなるんですね（**写真③—B**）。

これもちょっと写真が悪くて申し訳ないですが、一番よくわかるのは、体が大きくなってボリュームが出てきたので、このとき（**③—A**）は緋昭和みたいな感じだったんですが、白地がかなり腹の下から出てきて、そんなに昭和としてもうっとうしさ

◆ご来場お待ちしております。 ◆展示会以外のご来店は事前にTEL下さい。

と言うか、それがなくなってきています。

このとき（③―B）はまだ重ねの墨が、少し下地の緋盤が写って見えているような状態なんですが（b）、これをさらにもう1年、泉水で飼い込むとどうなるかというと、こうなります（写真③―C）。

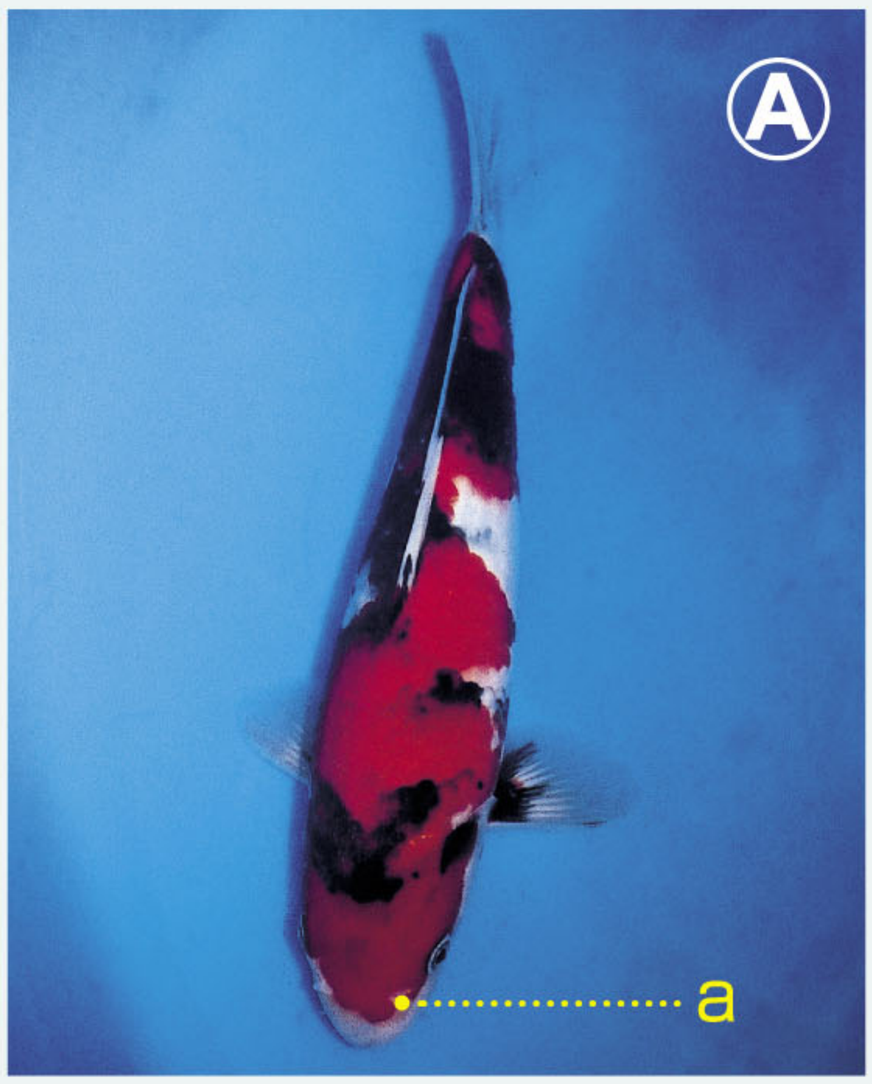
緋盤がすごく締まったと思われませんか。こっちのとき（③―B）よりも緋盤がすごく締まっていて、緋盤が締まったと同時に墨も凝縮されてきているので、下地の赤い緋がありったのが（b）、全く見えないくらい墨で覆われて（c）、鯉としては綺麗さを増してきているという状態です。

ですから、特に昭和に合わないような泥池から揚がってくると、2才のときは少しこういう感じで墨質が落ちたかな？という感じに見受けられることがあるんですが、ひとけら水で飼い込んで、こうやって魚冬泉が締まってくると、墨も緋も安定してくるという、その一つの例かなと思います。ちなみに、この鯉は当才のときに3万円の飼育コンテストで出している鯉です。

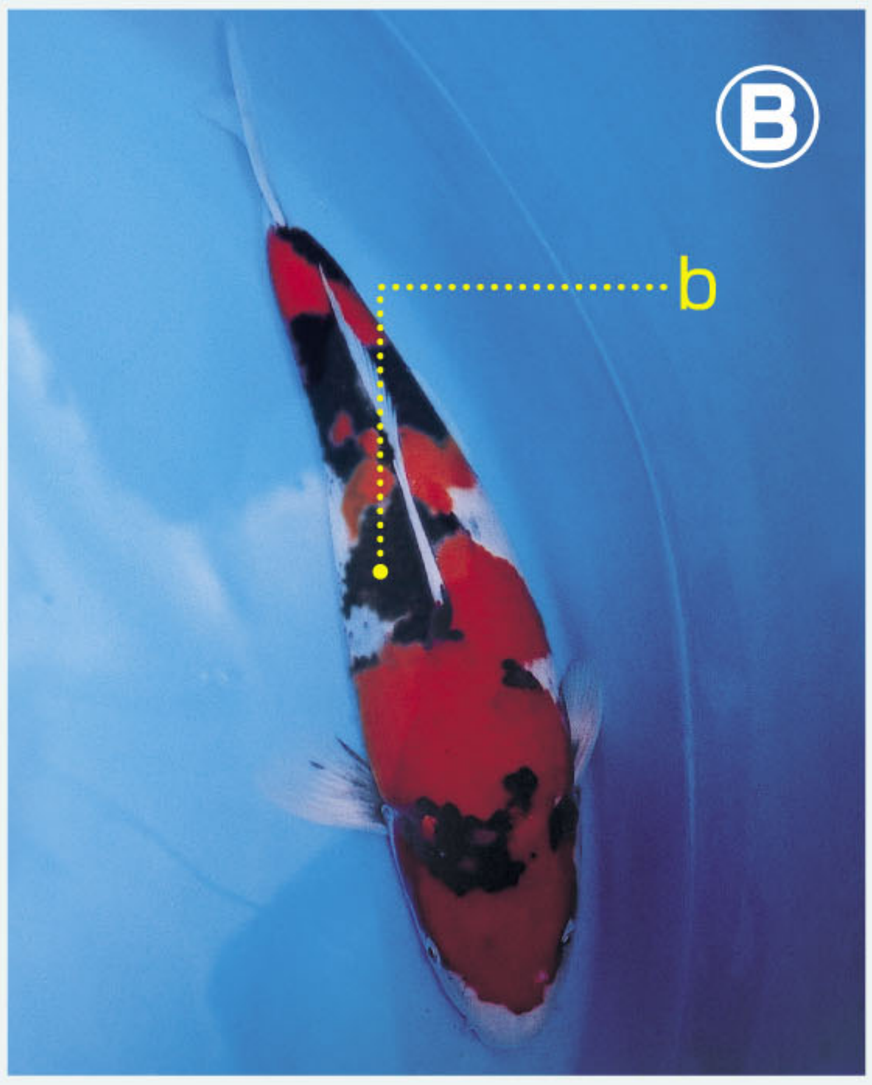
墨の変化を追う――大栄産昭和

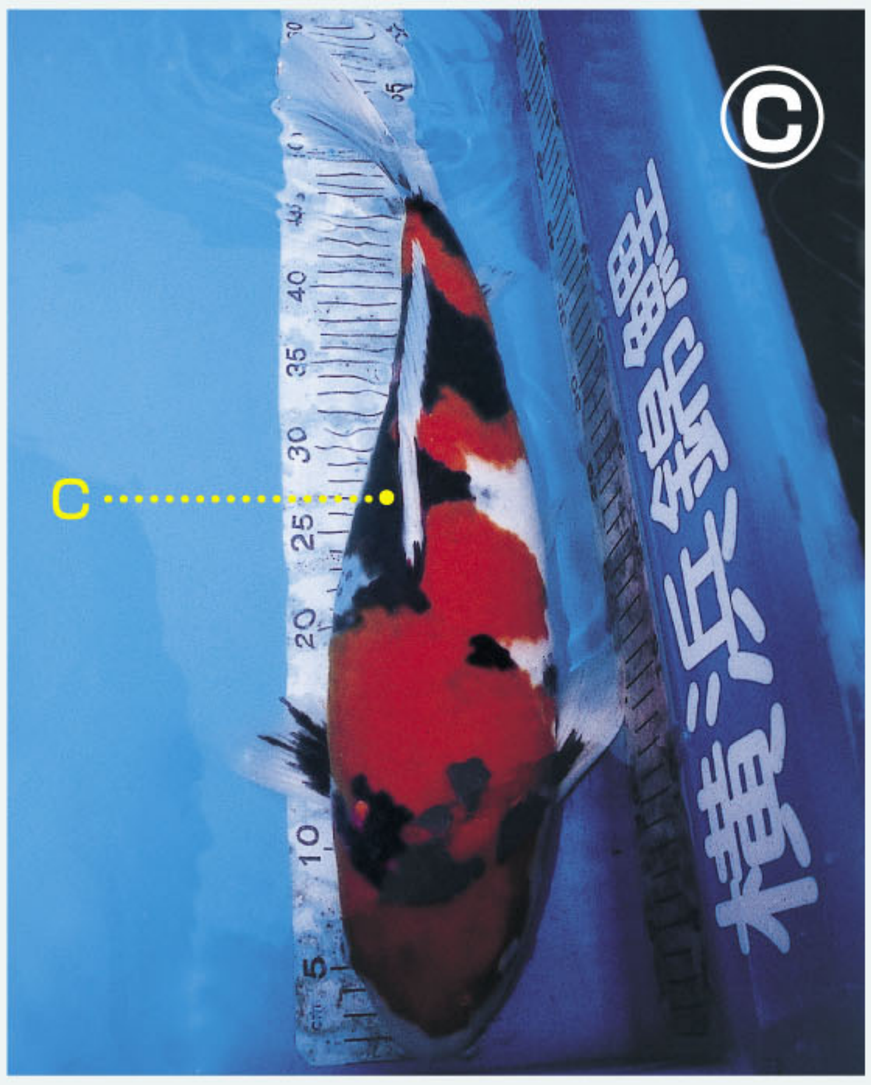
今度は別の生産者の鯉に目を向けてみたいと思います。新潟の塩沢の大栄昭和（大栄養鯉場）です。広告なんかで皆さんご存じかも知れませんね。この昭和は農業祭のときに僕が「ビビッ」ときちゃいまして、どうしても売ってほしかったので、土下座して売ってもらったんですけど、その当時これはカシラでめちゃめちゃ高かった鯉です。それはさておき……（笑）。

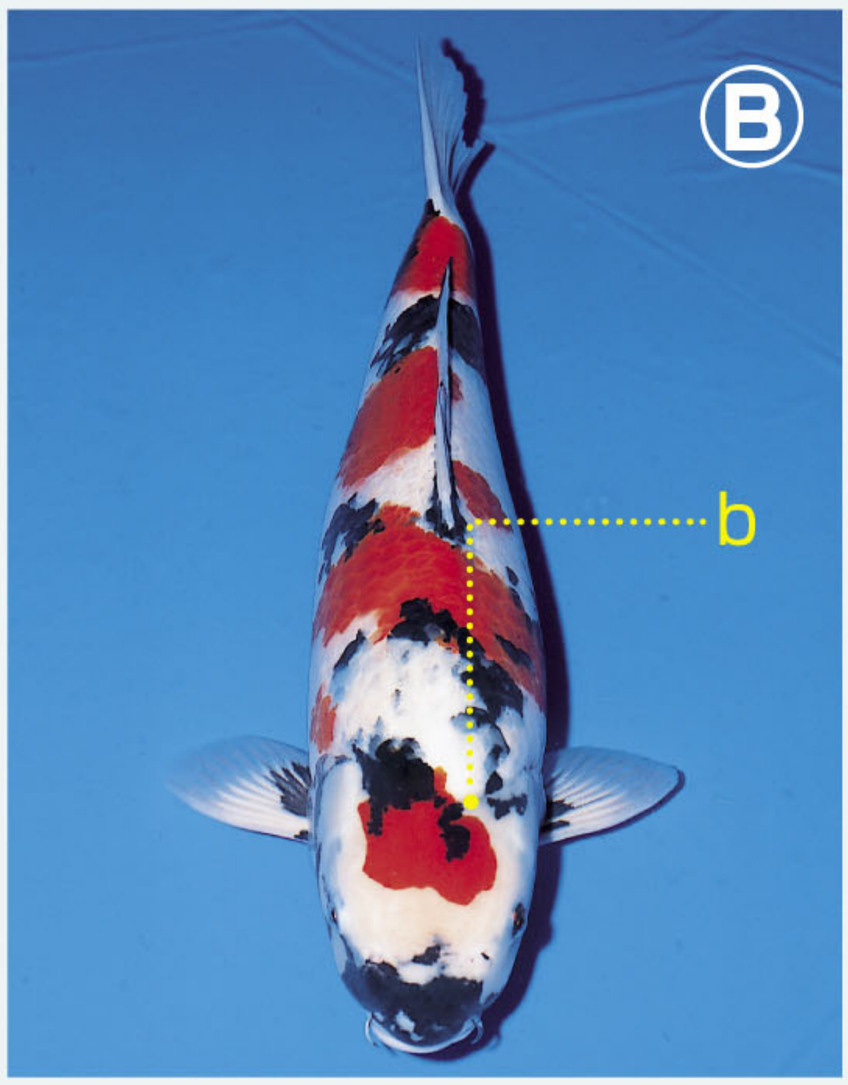
これが（④―A）翌年泥池に入れ

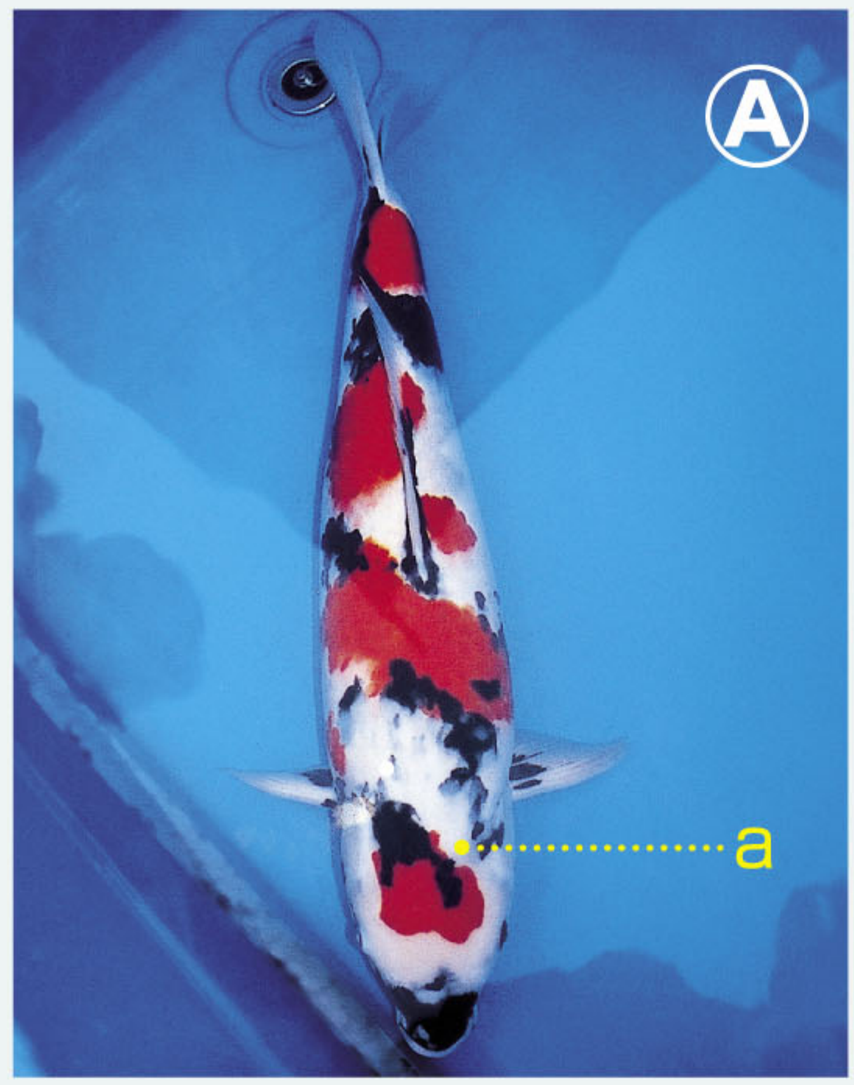


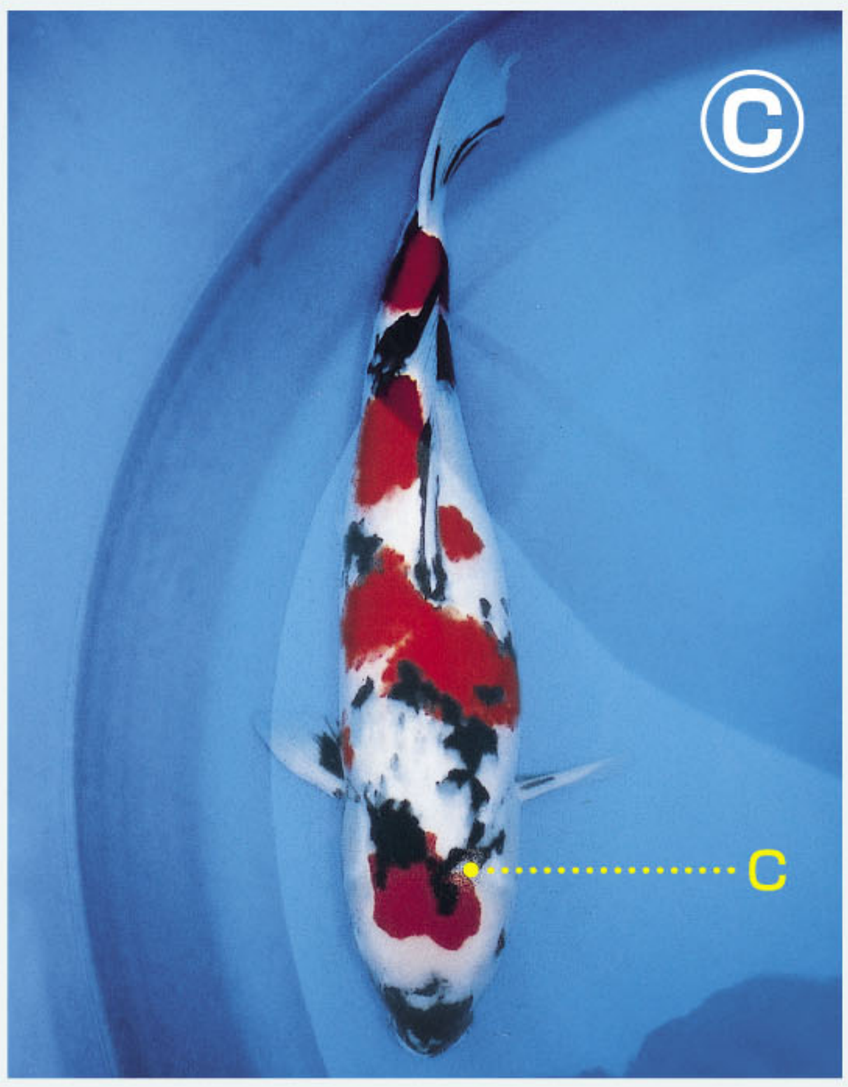
写真③／広島・阪井産「芙蓉」系











写真④／新潟・大栄産

る前の写真で、この鯉を仕入れてからだいたい10カ月くらい経ったときですね。墨がいい、模様ももちろん自分なりに気に入って、白地も良くて……この鯉は全国大会で賞を取れるんじゃないかと思って買ってきたんですが、それが惜しくも全国大会で国魚は逃したんですが、2番手になった姿がこのときです（**写真④**―**B**）。これは、東京大会で写真を撮ってもらったときのものです。3才ですね。

この鯉の変わり方は、鯉の体が変わったというか……ちょっと顔が尖ったような鯉だったんですが、頬の幅が入ってきて、鯉らしい格好になってきたということ、それと墨の変化ですね。この鯉は見ていただいても、あまり差がないことがわかっていただけると思いますが、ほとんど墨の変化がない鯉なんです。昭和の中でも、先ほどのように劇的に変化する墨がこともあるんですが、ほとんど変化しない鯉もこのようにあるわけです。

これ（**④**―**A**）とこれ（**④**―**B**）の差というと体が変わっただけで、ほとんど墨の変化がありません。それをさらにもう1年泥池で立てるとどうなるかというと、こうなったんです。これ（**④**―**C**）が4才の姿です。

4才で、じゃあどこが変化したかと言うと、ここでやっと墨が少し増えてきたんです。鉢のところの墨がつながってきたんです（**c**）。今までこれは全部島で分かれていたんですが（**a・b**）、ここが固まって出てきて、それで底墨と言うか、下に沈んでいる墨がこれでだいたい完成したというところですね。昭和にしては珍しくあまり大変わりしない、おとなしめの変化で経緯した鯉のひとつの例だと思います。